

NEWSLETTER of
the Japanese Society for Applied Animal Behaviour No.6
October 2006

ISAE Council Meeting (2006 Bristol) 報告

会長 近藤誠司(北海道大学北方圏フィールド科学センター)



2006年8月8日から12日まで、英国西部のブリストルで第40回国際応用行動学会議 (ISAE2006 Bristol、以下 ISAE 学会) が開催された。ISAE 学会開催に先立ち、恒例により ISAE Council Meeting(理事会)が、会場のブリストル大学 Wills Memorial Hall で開催された。近藤は東アジア地区理事 (Regional Secretary) として、この会議に参加した。なお、参加には応用動物行動学会が管理する基金の補助を受けている。

会議は当日の午前 10 時から始まり、途中で昼食をかねた休憩(1130~1300)を挟み、夕方 18 時過ぎまで続いた。毎回のことであるが、この理事会は根回しやら前もつての下準備などほとんどない状態で行われるので、やたらに時間がかかる。

出席者は会長の Marek Spinka 氏(チェコ)はじめ、各役員、地区理事など 16 名(男性 7 名女性 9 名)が出席し、また当該 ISAE 学会の事務局をつとめている Chris Sherwin 氏は当然のことながらやたら忙しく出たり入ったりであった。会議は Spinka 会長の開会の挨拶に引き続き、出席者の確認と欠席者のお詫びがあり、ついで前回のメール会議 Web-meeting(2005 年 12 月と 2006 年 3 月)の議事録が確認された。

ついで、この ISAE 学会のこの時点での状況が、Chris Sherwin 氏から報告された。参加者 381 人、27 カ国で、うち 105 名が英国本国からの参加者である。アブストラクトは 260 編が受理され、59 編について委員会より revise 指示があった。リジェクトされたものは 1 編であった。発表演題 260 題のうち 115 題が口頭で、145 題がポスター発表であった。また、この ISAE 学会の経理関係が報告された。支出総額はこの時点で 92,516 ポンド(1ポンド=200 円で計算するとおよそ 1,850 万円)、収入は 94,150 ポンド(同約 1,883 万円)となっている。

また、Chris Sherwin 氏から、今回 ISAE 学会を開催するにあたり、問題となってきた点がいくつか指摘された。例えば、ISAE 学会のゴージャスさの問題である。会員のいる層は ISAE 学会そのものがもっと華やかになることを望んでいるが、ある層、例えば学生会員などは望んでいない。もし、より華やかな ISAE 学会が続くとしたら、学生会員向けのディスカウントは大きくなり、他の一般会員はこれを負担しなければならない。でなければ、おおきなスポンサーを獲得するしかない。

ISAE 学会は実際、かなり巨大になってきている。もう ISAE 会員によるオーガナイズは実質的に無理なところに来ているのかも知れない。口頭発表が一層増えれば(実際この数年増えつつあるが)、現行の体制では維持できないだろう。

オーガナイザーが毎年変わるというやり方も問題があるだろう。今回のブリストルの実行委員会も、全くゼロから始めなければならず、これがおおきな負担となった。また、発表の質の問題も大きい。ISAE の方針としては「発表申し込みはすべてをアクセ

プト」であるが、実際に質を維持しようとする委員会は矛盾を感じている。何らかの基準を設けるべきではないかと思われる。

以上のような問題点が指摘されたが、昨年の私どもが行った ISAE2005 でも同じ問題に直面したのは皆様ご存じの通りである。ただ、学会経費については理事会では「昨年の日本のケースは特殊」という扱いであった。というのは、私どもの昨年の ISAE 学会は、学術会議の認定を受けた国際学会であり、「国の補助を受けた会議」と、各理事に認識されているからである。

ついで Senior Vice-President (上席副会長) である Ruth Newberry 女史から主に今後の ISAE 学会について報告があった。まず、2007 年から 2010 年までの開催地、国、担当者は以下の通りである。

2007 年 Merida Mexico Dr. Francisco Galindo

2008 年 Dublin Eire Dr. Akison Hanlon

2009 年 ----- Australia Dr. Carol Petherick

2010 年 Uppsala Sweden Dr. Lena Lidfors

2009 年の Australia の ISAE 学会の開催地は未定である。2011 もしくは 2012 年のどちらかで Vienna Austria での開催が検討されているが、これについては他の候補地(できればヨーロッパ以外)のノミネートをまち、投票することになる。

来年のメキシコ大会については、以下のような日程が組まれている。

2006 年 12 月 1 日 アブストラクトの受け付け開始

2007 年 1 月 15 日 レジスタレーションの受け付け開始

2007 年 2 月 19 日 アブストラクト申し込み締め切り

2007 年 3 月 2 日 参加費ファンドの申し込み締め切り

2007 年 3 月 5 日 HSUS 旅費補助の申し込み締め切り

2007 年 4 月 14 日 アブストラクトの審査終了

2007 年 5 月 11 日 Discount 登録締め切り

2007 年 7 月 30 日 ~ 8 月 4 日 学会開催

なお、メキシコ大会のウェブサイトは既に本年 7 月 25 日からオープンしているので参照されたい(www.isae2007.com)。参加費は Discount 登録(2007 年 5 月 11 日以前)で、学生会員 95 英ポンド、学生非会員 125 ポンド、一般会員 220 ポンド、一般非会員 250 ポンドとなっている。5 月 12 日以降は学生会員でおよそ 30%、一般会員で 14%ほど高くなっている。

メキシコ ISAE 学会に対して ISAE 理事会は 18,100 ポンドを援助することになり、こうした援助額の増額は今後も続けられるようだ。また、そのほかにメキシコ ISAE 学会から、アブストラクト提出と審査について基準を明確にすること、優秀ポスター審査システムの基準を明確にすることとなった。これらは、昨年の ISAE2005 でも課題としてプログラム委員やポスター賞審査委員会から挙げられており、私が委員をしている ISAE 学会助言委員会を通して日本から挙げられた問題が生きた形となった。

Junior Vice-President (次席副会長) の Janice Swanson 女史からは各地域の理事からの報告が紹介された。現 11 地区 (Australasia & Africa, Benelux, Canada, East Asia, East Central Europe, Latin America, Mediterranean, Nordic, UK & Ireland, USA, West Central Europe) のうち、9 地区がレポートを提出した。わが東アジア地区も昨年の ISAE 学会の結果、それ以降の応用動物行動学会の大会・シンポジウムなどについて報告が行われた。

なお各地区理事の内、Canada,については Derek Hhaley 氏から Stepanie Torrey 氏に、East Central Europe は Gudrum Illman 女史から Boris Blick 氏に変わり、現在まで未定であった Mediterranean は Elisabeth C 女史(すいません、聞き落としました)、Australasia & Africa 地区は Lindsay Mathew 氏が新たに任命された。地区理事の任期はたしか3,4年だった様な気がして、各理事に聞いてみたが皆さんあまり明確に記憶していなかった。近藤はオランダ ISAE 学会から地区理事を務めているのでそろそろ無罪放免になるのでは、と期待しているのだが…。

今年度で改選となる理事職が6つ有り、新たな理事として以下の方々が認められた。その他の継続理事については ISAE の HP の ISAE Council Member を参照されたい。

Treasurer Debbie Goodwin 女史

Senior Editor Vicky Sandilands 女史

Junior Editor Joe Garner 氏

Procedural Adviser Carol Petherick 女史

Educational Officer Maria Andersson 女史

Ethics Committee Chair Stine Christiansen 氏

当初配布された議事予定はまだまだ項目があったが、実際には時間切れとなり、残りについては今年12月に予定されている Web-meeting で論議されることとなった。

第40回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告

松浦晶央(北里大学獣医畜産学部)

第40回国際応用動物行動学会は、2006年8月8日から12日までを会期として、英国のプリストルで開催された。本大会の参加者数は Proceedings を見る限り370名であり、日本からは私を含め、11名が参加した。

本大会のテーマは大きく三つあり、Experimental studies and theoretical approaches in fundamental biology that underpin progress in applied ethology, New methods and technologies in applied ethology および Applied ethology studies that generate progress in our understanding of fundamental biology であった。会場である University of Bristol の Wills Memorial Building 内部には荘厳な雰囲気、日本国内の学会では味わえない体験ができた。ただし、外装は工事中であり、足場が組み立てなければさぞかし素晴らしい記念撮影が出来たのにと少し残念であった。

私が最も興味を感じた発表は、Severine Henry らの Influence of various early human-foal interference on subsequent human-foal relationship であった。この研究は、生後直後の子ウマのハンドリングには、どうもその子ウマの母ウマとヒトとの関係の構築が影響しそうであることを示していた。確かに、これまで私が経験してきた実感ではその通りであるが、科学的に検討された例はなかったので非常に新鮮に感じた。もう1題、ポスター発表の Validation of salivary cortisol as an indicator of HPA activity in horses も興味深かった。血漿中コルチゾール濃度は従来行動学研究によく用いられてきたが、唾液中コルチゾール濃度に関しては今後さらに検討する余地がある。唾



液中コルチゾール濃度の測定は、非侵襲的である点と、サンプリングにかかる時間や手間が少ない点から welfare research に有効である。この研究では、ウマの唾液中コルチゾール濃度は軽い運動刺激の後で運動前より有意に高まり、日常管理上のストレスによる行動指標との間に有意な正の相関があることが示された。ただし、このストレス提示の前と後の間には変化の傾向が見られたものの、有意差は認められなかった。これら2題とも若い研究者の発表であったため、大いに刺激になった。

私自身は、波形分析による乗用馬の振動解析についてポスター発表を行った。基礎的な内容であったため質問者が来てくれるか不安であったが、計4回のポスターセッションで毎回3人ほどから質問やコメントを受け、大変勉強になった。ポスター会場は Wills Memorial Building の隣にある Merchant Ventures Building で行われた。この建物の内部は無機的で部屋も手狭であり、快適であるとはいいがたかった。

英国での滞在期間中、二つの動物園を見学した。London Zoo は、動物種が750を越える英国で最も広い動物園であり、世界で最初にできた科学動物園としても有名である。展示法はなかなか良く、動物は十分なスペースの中でゆったりと暮らしているように見えた。しかし、さらに素晴らしく感じたのは Bristol Zoo の方であった。小規模で、かつ特別珍しい動物もいないが、動物が暮らしやすく、人が見学しやすい動物園であると感じた。やはり人気もあるようで、園内はたくさんの人で賑わい、雰囲気の良い動物園であった。

動物園見学も含め、本大会の参加は私にとって大変有意義なものとなった。今後は言語能力を磨くとともに、言語の壁を乗り越えて活発な発言をする勇気を身につけたい。

日本家畜管理学会共催 2006年度秋季シンポジウム開催予告

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)



タイトル:「家畜管理学と応用動物行動学が扱う範囲は?
- 共通部分と独立部分 -」

開催場所・日時: シンポジウム会場: 農林水産技術会議事務局 筑波事務所
本館内共同利用施設 3階、第3講義室
10月25日 13:00~17:00

参加費は無料です。参加希望者は、10月13日までに、宇都宮大学青山に、メールあるいはFAXにて申し込むようお願い致します。

懇親会: 同1階 喫茶室 または 食堂
10月25日 17:30~

参加費は2,500円程度を予定しています(若干の変更あり)。参加希望者は、上記申込先(宇都宮大学青山)まで、ご連絡願います。

会場へのアクセス: <http://ss.cc.affrc.go.jp/public/sitemap/syozaiti/syuuhen.html>

シンポジウムの主旨

平成 14 年 3 月に応用動物行動学会が設立されて以来、応用動物行動学会は日本家畜管理学会と共同で会誌を発行し、研究発表会を開催しています。家畜、実験動物、展示動物、野生動物の行動を対象にした研究者が一同に会し、他分野の研究発表に触れることにより、それぞれの分野で研究の幅は広がっています。しかし一方で、家畜管理学会の先生からは、施設管理、搾乳管理や糞尿管理など、重要な家畜管理学分野の、本学会における扱われ方が小さくなって来ている懸念の声も挙がっています。今回のシンポジウムは、主に家畜管理学に携わる人たちが、「家畜管理とは？」という概念を整理することを主な目的としたものです。

上記のように本シンポジウムの主催は日本家畜管理学会であり、主な対象者は家畜管理に関わる分野の研究者ですが、「飼育動物の行動管理」と「飼育施設の管理・廃棄物の管理」の関係の重要性は、実験動物・展示動物など、家畜以外の飼育動物の分野においても変わらないはずで、自分の研究対象がたとえ家畜ではなくとも、本シンポジウムの議論は重要なヒントになるかも知れません。多数の研究者のご来聴を歓迎致します。

当日、都合により参加できなくとも、上記のテーマに関して何か意見をお持ちの方は、青山(連絡先は下記)までメール、FAX あるいは郵送で意見を頂ければ幸いです。当日紹介し、議論に盛り込みたいと思います。

なお本シンポジウムは、畜産草地研究所の平成 18 年度家畜ふん尿処理利用研究会「畜産における環境影響評価とその利活用」に続けて開催されるものであります。都合がございましたら、こちらの方も合わせて参加されると良いと思います。

(URL: <http://nilgs.naro.affrc.go.jp/conference/hunnyosyori2006/yoryo1024.html>)

問い合わせ等

青山 真人

〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学農学部

Tel: 028-649-5438、FAX: 028-649-5401 e-mail: aoyamam@cc.utsunomiya-u.ac.jp

干場 信司

〒069-8501 江別市文京台緑町 582 酪農学園大学酪農学部

Tel/FAX: 011-388-4813 e-mail: hoshiba@rakuno.ac.jp

編集後記

北海道十勝ではビートの収穫も始まり、まさに収穫の秋本番ではありますが、すでに“ゆきむし”(トドネオオワタムシ)が飛交う姿もみられ、冬の足音が…。そんな中、この週末に道内を通過した低気圧の影響で、暴風雨による畑作物への被害も出ております。さらに牛舎の屋根が吹き飛ばされたり、サケ定置網漁への被害は数億円との報道も。

さて、今年度第 3 号のニュースレター (No.6) をお届けしました。当初 9 月発行を予定していましたが、韓国プサンで開催された AAAP への参加、済州島でのウマ飼養調査・講演などが重なり遅れましたこと御了承下さい。次号 (No.7) は春季学会大会、シンポジウムの案内などで、年内発行を予定しております。(記 河合正人)

